

図書館だより



Fuji Women's
University
Library

No.104
2025.4



1. 「Tolle, Legeー取って読みなさいー」
ー 聖アウグスティヌスが聞いた天からのつぶやき ー
..... 学長 渡邊 頼純
4. 教員著作紹介
6. 大学生の図書館実習、
蔵書点検ボランティアと中学生の職場体験
7. 第7回 学生選書ツアー開催
7. LiSt活動報告 第10回
8. 図書館資料Navi 第18回
「食べるもの」と「食べること」
食環境マネジメント学科/食物栄養学科
..... 八島 絵美

CONTENTS



「Tolle, Legeー取って読みなさいー」 ー 聖アウグスティヌスが聞いた天からのつぶやき ー

学長 渡邊 頼純

皆さんはアウグスティヌスという人の名前を聞いたことがありますか。カトリック教会の聖人で北アフリカのヒッポ（現在のアルジェリア南部）というところの司教だった人です。

「聖人」(saint)と教会で認められるのは結構大変で、最近ではインドのコルコタ（カルカッタ）で行き倒れの人々を宗派を超えて看病し、人間の尊厳をもって死を迎えることができるような収容施設（House of Destitutes）を建てたマザー・テレサもそのひとりです。マザーテレサは日本にも来たことがあり、1982年に上智大学で講演された時に当時大学院生だった私も直接お話を聞いています。「愛の反対は無関心です」というメッセージは今でも鮮明に覚えています。

日本人では豊臣秀吉の時代に殉教した「長崎26聖人」が有名で、長崎にはその記念館があります。江戸時代初期にまで及ぶ迫害は壮烈なもので、『沈黙』という映画の中でもリアルに描写されています。迫害の厳しさを想像すると私がそのような状況に置かれたら即「転んで」しまうだろうと思い、自分が情けなくなります。つまり聖人というのはよほどのお恵みがない限り、なかなかない天の上の存在なのです。

アウグスティヌス（354～430）はそんな聖人ですが、実はたいへん親しみやすい聖人なのです。



彼は北アフリカのローマ帝国領土ヌミディア州のタガステに異教徒の父と熱心なキリスト教信者の母（聖モニカ）との間に生まれました。今風に言えば、おそらくは割と裕福なビジネスマンで世俗的な信心しかない父親と、当時ニケーアの宗教会議等が開かれて教義らしいものがようやく出来つつあったキリスト教を真剣に信じている母親との間にアウグスティヌスは生を受けたということになります。

アウグスティヌスの主要な著作の一つである『告白録』の中には母モニカについても興味深い記述があります。どうやらモニカは夫がいつも仕事で忙しくして独りぼっちでいることが多く、少しずつ飲むワインの量が増えていつの間にかアル中になっていたようです。現代的に言えば「キッチン・ドリンカー」だったのかもしれませんが。モニカがそんな状態から苦しみながらも祈り回復していく様子も描かれています。



『告白』（中公文庫）

アウグスティヌス著、山田晶訳

中央公論新社、2014.

請求記号：132.1/A96/1-3（本館所蔵）

*アウグスティヌス著の『告白』『告白録』は訳者が異なる資料も所蔵しています。

そんな環境で何不自由なく育ったアウグスティヌスは知的好奇心の極めて旺盛な少年であったようです。19歳で当時の「貿易立国」カルタゴに「留学」、キケロの哲学書を読んで哲学的精神を呼び起こされ、当時北アフリカ地方に流行していたマニ教という宗教に身を投じます。その間にガールフレンド（ズ）と深い仲になり、子供までつくってその子にAdeodatus（「神によりあたえられし者」の意）という名を与えている点など本当に憎めない感じがする青年でした。

その後、放蕩の限りを尽くしたカルタゴからローマに渡り、更にミラノに弁論術の教師として赴任、

そこで司教のアンブロシウスと出会います。そのアンブロシウスから深い人格的感化を受けると同時に、新プラトン学派の哲学を学び、観念的なものを見る目が開かれることになります。しかし、そのときの彼はまだ「悟り」を開けず、そのことに大いに思い悩み、心はちぎに乱れていました。そんな時にミラノのとある家の庭から子供の歌声にまぎれて聞こえてきたのが“Tolle, lege”（トレ・レジェ「取って読みなさい」）という声だったのです。その子供の歌声を聞いたことをきっかけにアウグスティヌスは聖書を手に取って読みます。その個所はたまたま聖パウロの「ローマ人への手紙」13章13-14節でし



ベノッツォ・ゴッツオリ

『聖パウロの手紙を読む聖アウグスティヌス』

サン・ジミニャーノ、サンタゴスティーノ聖堂

*『ベノッツォ・ゴッツオリ：素描研究と色彩への関心』

クリスティーナ・アチディーニ・ルキナート著、

池上公平、野村幸弘訳 東京書籍、1995

請求記号：702.3/188/12（本館所蔵）より

た。そこには何と書いてあったのでしょうか。聖パウロはローマの教会の信徒たちに「救いは近い」と説きながら次のように言います。「酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いと妬みを捨て、主イエスを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。」

この言葉は現代を生きる私にとっても耳に痛いことばですが、どうやらアウグスティヌスにとっても心に「突き刺さる」メッセージだったようです。こうして彼は自らの内的葛藤に終止符を打ち、遂に回心します。その時彼は32歳位だったと言われています。

「主イエスを身にまとう」とはどういうことでしょうか。そこにはキリストとの霊的結合が表現されています。この結合を通して人は新しく生きる者とされ、古い自我と罪の生活に打ち勝つことができるようになるとのパウロの信念が伝わって来ます。この箇所はパウロがローマにいるキリスト教徒へむけたメッセージと勧告の中で最も具体的な内容が入っている部分であり、なかなかパンチがあります。この箇所をアウグスティヌスが知らぬはずはなく、その内容の故にむしろ目をそむけたかったのかもしれませんが。そんな折にこの“Tolle, lege”という歌声が彼の注意をひき、彼の意志を欲望の極みと迷いから引き戻したのでしょう。これが聖アウグスティヌスの「回心」(conversion)の顛末であります。

ここで「回心」と書きましたが、これが心を改める「改心」でないことも重要です。人の心は何が正しいことで、何が間違ったことかを知っています。放蕩と享樂の中にあったアウグスティヌスはたびたび「我に節操を与えたまえ」と祈りますが、そのすぐ後に「しかし今ではなく」と付け加えていました。何が正しいことなのか分かっているのにそれが実行できない人間の弱さを表す英語の表現にAugustinian chastity というのがあります。「アウグスティヌス的な節操」という意味ですが、正しいと分かっているでもそれを直ちに実践することが難しく、先延ばしにしようとすることを指しています。でも“Tolle, lege”という声を聞いた後の彼は正しいことの方へ心を「回した」のです。

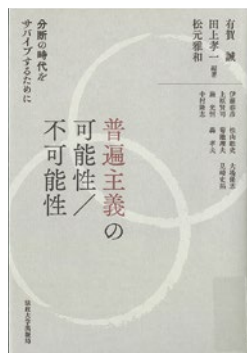
さて話を私たちの身近な大学図書館に戻しましょう。私のような凡人にとっては聖アウグスティヌスのような宗教的回心は甚だ遠いものであります。せいぜいできるとすれば知的な理解における回心、自らの知的暗さを改善する努力くらいですが、それも十分出来ているとは思えません。しかし、ありがたいことに私は半世紀以上大学という場所に身を置いてきました。大学の図書館というところはこのような「知的回心」を大いに助けてくれる場所であります。大学に生きる者にとってこの上なくありがたい存在だと思っています。人との出会いがそうであるように、書物との出会いもまた決定的な意味をもつことがあります。聖アウグスティヌスが聞いた“Tolle, lege”という声はひょっとしたら幻聴だったかも知れませんが、しかし、おそらく彼は神のメッセージを聞く耳をもっていたのではないのでしょうか。あのよう生き方を根本から変えるような回心に導く幻聴ならば私も聞いてみたいものだと思います。日常の雑音に妨害されがちではありますが、知的回心に導く“Tolle, lege”(取って読みなさい)という声が私たちにも聞こえてきているのではないのでしょうか。

藤の皆さん、北16条の図書館でも花川の図書館でもちよっと立ち止まって耳を澄ましてみませんか。「取って、読んで」という声が聞こえてきませんか。藤の図書館は大学の図書館としては国内でも屈指の蔵書数を誇り、難しい専門書から気軽に読める楽しい本まで取り揃えて皆さんの来館を待っています。是非藤の図書館で至福の時をお過ごしください。

最後にこれは蛇足ですが、私の妻の霊名(クリスチャンネーム)は前述のモニカです。彼女が私との結婚を前にプロテスタントからカトリックに改宗したときにこの霊名を頂きました。彼女はアル中ではありませんが、お酒は強いです。長男の霊名はですって? それはもちろんアウグスティヌスです。ちなみに私の霊名は日本でも布教したことのあるイエズス会士のフランシスコ・ザビエル、長女はカルメル会の創始者マリー・テレーズのお名前を頂いています。神に感謝。

教員著作紹介

先生方に自著紹介をしていただきました。各キャンパスの教員著作コーナーに本がありますのでぜひご利用ください。

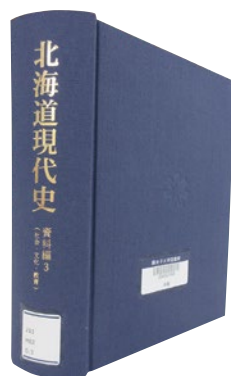


『普遍主義の可能性／不可能性：分断の時代をサバイブするために』 有賀誠、田上孝一、松元雅和編著

法政大学出版局発行 2024年2月10日 所蔵館：本館

文化総合学科 **上原賢司**

いかついタイトルですね。あえてラフに紹介しますと、「分断」が進む世界において、どうやって暴力的で一方的でない語り方や理解の仕方での「多様性」を考慮できるのかを模索した「論文集」となります。私は、「『コスモポリタニズム』というアイデアは役に立たないのでは?」という疑問に対して「そんなことないよ、意味あるよ」と答える論考を書きました（ただ、初学者フレンドリーではありません）。私の章はともかくとして、グローバル化やナショナリズムといった現象、西洋（日本）思想に興味ある方、それらの政治・法哲学的研究スタイルを学びたい方には参考になる一冊でしょう。



『北海道現代史：資料編3 社会・文化・教育』 北海道総務部行政局文書課道史編さん室編

北海道発行 2024年3月19日 所蔵館：本館

文化総合学科 **大矢一人**

北海道では、命名150年として『北海道現代史』全五巻（通史編二巻+資料編三巻）と『北海道クロニクル』（全二巻）、そして『北海道史年表』の計八冊を2023年以降に発刊することとした。「資料編3」は「資料編2 産業・経済」に引き続き発行されたものである。

大矢は「第二部 教育」の「第一章 占領下の教育改革」について、史料選定と解説を担当した。「第一節 占領の開始と連合軍の指令、学校視察」では、軍政部月間活動報告書（訳文）を掲載したことが珍しいであろう。「第二節 占領軍の教育施策への指導」では、民主主義へ転換を図るため、週五日制授業、教育委員会選挙への啓蒙活動などを掲げた。なお、発刊を記念した講演会（2024年10月2日）で大矢は、「占領下北海道の教育改革を明らかにするための史料発掘の方法と経緯 一日米双方の史料に目を配って-」を担当した。動画が2024年12月にアップされ、2025年12月末まで視聴可能（URL：<https://youtu.be/I727Q8uMV-E>）ですので、興味ある方はご覧ください。

食環境マネジメント学科 / 食物栄養学科 **菊地和美**

『北海道現代史：資料編3 社会・文化・教育』「第一部 社会・文化」の「第十一章 食文化・住文化」を私は、担当しました。【食文化】は、食の変遷を終戦以降から構成した内容になっています。

「第一節 食生活の変化の兆し」、「第二節 食生活の洋風化・多様化」では、終戦～1970年代における学校給食やパン食の普及と洋食浸透（ジンギスカン、十勝ワインの誕生など）。「第三節 量から質への転換」では、1980年代～における北海道米改良・きらら397、「スープカレー」認知の広がりとその背景、道産素材を用いた商品開発などが挙げられています。北海道史から食の変遷を調べてみませんか？



『明治三十年代 漱石・露伴・その他』 関谷博著

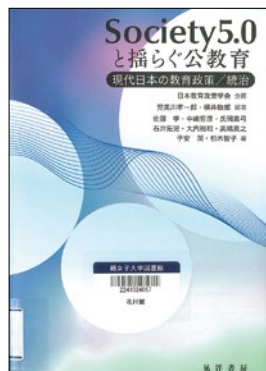
翰林書房発行 2024年3月1日 所蔵館：本館

本学非常勤講師（元日本語・日本文学科教授） **関谷 博**

サブタイトルは「文学の制度化と日露戦争」。七年前にまとめた論文集『明治二十年代 透谷・一葉・露伴』の姉妹編にあたります。

日本が帝国として制度的な完成を遂げた明治三十年代の文学状況論が前半（サブタイトルはこの部分を指しています）、後半は私の第一論文集『幸田露伴』以来継続している露伴研究です（今回は特に仏教・儒教と露伴文学の関連を扱った）。その他、中学・高校用授業教材に関する論文3本、それから末尾に小川洋子『原稿零枚日記』についてのエッセイをくっつけました。これはエピグラフに掲げたフォイエールバッハ『キリスト教の本質』からの一節と呼応するよう仕掛けたつもりです。

*姉妹編『明治二十年代 透谷・一葉・露伴』本館に所蔵あり。



『Society5.0 と揺らぐ公教育：現代日本の教育政策 / 統治』 日本教育政策学会企画、児美川孝一郎、横井敏郎編著

晃洋書房発行 2024 年 8 月 30 日 所蔵館：花川館

地域創生学科 / 人間生活学科 **高嶋真之**

1人1台端末の導入やテクノロジーの飛躍的な発展など、現在の学校教育は私たちが経験してきたそれとは大きく姿を変えています。そして、これらの背景には政策というものがあり、実践のあり方を大なり小なり規定しています。本書では、新型コロナウイルスの渦中にあった2020年～2023年に日本教育政策学会という学会で議論されてきた公教育の構造的な変化について多角的に論じられています。その中でも高嶋は、社会課題の解決を掲げながら公教育への関与を強めている民間教育企業に着目してその両義性について考察しています。いわゆる学術書で内容も難解かもしれませんが、目次を見て興味関心をもった章だけでもチャレンジしてみてください。



公教育の再編と子どもの福祉 1 実践編 『「多様な教育機会」をつむぐ：ジレンマとともにある可能性』 森直人、澤田稔、金子良事編著

明石書店発行 2024 年 9 月 25 日 所蔵館：花川館

地域創生学科 / 人間生活学科 **高嶋真之**

「教育」という言葉を聞いたとき、多くの人は真っ先に学校を思い浮かべると思います。けれども、今日の社会には学校の他にも様々な学びの場があり、従来の学校の論理にとらわれない多様な実践が展開されています。本書では、研究者や実践者が集まって続けられてきた「多様な教育機会を考える会（RED研）」での交流や議論の成果がまとめられています。その中でも高嶋は、自分もチューターとして関わりをもっている「鹿追町オンライン公設塾」を対象にバーチャル空間を活用した実践について論じました。こちらは「実践編」ですが、もう1冊の「研究編」（『「多様な教育機会」から問う：ジレンマを解きほぐすために』）も手に取ってみてください。

* 『「多様な教育機会」から問う：ジレンマを解きほぐすために』 花川館に所蔵あり。



『発達障害のある大学生のアセスメント：理解と支援のための実践ガイド』 高橋知音、佐々木銀河、中野泰伺編著

金子書房発行 2024 年 3 月 29 日 所蔵館：花川館

子ども教育学科 **中野泰伺**

皆さんは「アセスメント」と聞いて、どのようなイメージを持つでしょうか？ 知的・発達障害のある方々への支援に際しては、まずそのような方々の趣味や好きな事物（興味・関心）や生活上の困りごと、物事の捉え方といった「その人の世界」を理解することが大切です。「その人の世界」に触れて、「面白いなあ」と感じたあなたは教育者・保育者の素質アリ! かもしれません。本書は主に青年期・成人期を軸としたアセスメントの本ですが、この本との出会いを機に、世の中には多種多様な人間がいることを実感したり、身の回りのさまざまな人々に関心を寄せたりして、ご自身の「世界」も広げていってもらえると嬉しいです。また、本書の著者らがこだわり抜いた「表紙のデザインの意味するところ」についても推理する等、文章だけではなく本の魅力（デザイン等）に思いを馳せながら、さまざまな本との出会いを大切にしていってほしいと思います。

* 2025 年 4 月、人間生活学部はウェルビーイング学部へ、人間生活学科は地域創生学科、食物栄養学科は食環境マネジメント学科に名称変更しました。

大学生の図書館実習 蔵書点検ボランティアと中学生の職場体験

2024年度も図書館実習、職場体験を実施しました。

また蔵書点検については、2023年度に引き続き図書館情報学課程の希望者に協力していただき、地下集密書庫資料の蔵書点検を行いました。

実習後に書いてもらった感想を一部抜粋でご紹介します。（*実習当時の学年を記載しています。）

大学生の図書館実習 本館 8月8日-9日 本学学生 2名

蔵書点検ボランティア 本館 8月19日-23日 本学学生13名

図書館実習では、2日間の日程で受入作業や装備、カウンター業務など図書館の業務について実習を行いました。図書館の仕事として利用者から目に見えているカウンター業務だけではなく、受入、書誌データの入力など様々な業務について学んでもらいました。

夏季休暇中には、図書館で計画を立てて行っている蔵書点検（蔵書が所蔵データ通りにあるか確認する作業）を図書館情報学課程の皆さんにご協力していただき実施しました。2024年度は多くの学生にご協力いただけたため、地下集密書庫の資料を対象に実施しました。

実習を行った学生2名の感想をご紹介します。

図書館実習 日本語・日本文学科2年 **三橋さん**

二日間の実習を通して図書館の仕事を実際に体験させていただいたことで、普段の図書館利用で目にするカウンター業務だけでなく、図書館の業務がいかに多岐にわたるかを知ることができました。また、図書の受入の手順に沿って、図書館システムを用いた入力作業や登録した図書の装備・配架も体験させていただき、受入した図書がどのように図書館に並ぶのかを身をもって学ぶことができました。二日間の貴重な体験を活かして、今後も図書館情報学の理解を深めていきたいと思います。

図書館実習、蔵書点検ボランティア 日本語・日本文学科2年 **橋内さん**

図書館実習として大学図書館での業務を体験できる貴重な機会をいただき、多くのことを学びました。NDCによる分類やそれに沿った配架の仕方、通常の書籍と逐次刊行物の受入・登録方法の違いなど、図書館情報学課程の講義で知識として学んできたことが実際の業務と結びつき、とても理解が深まったと感じています。普段図書館を利用しているだけでは見ることができない部分についても知ることができ、興味深かったです。

実習の他に、蔵書点検のボランティアと資料の除籍作業にも参加させていただきました。どちらも体力を使う仕事で、私の持っていた司書の仕事に対するイメージが少し変わりました。図書館業務について様々な面から知ることができ、充実した夏休みを過ごすことができたと思っています。本当にありがとうございました。

中学生の職場体験 花川館 10月22日 石狩市立樽川中学校 3名

2024年度は、花川館で1校職場体験を行いました。学生スタッフLiStによる学内案内や職員からの図書館業務についての説明を行った後、貸出・返却などを実際に体験してもらいました。

生徒さんの感想を一部ご紹介します。

庵さん

職場体験を通して、図書館司書の仕事や大学について色々知ることができました。藤女子大学図書館を見て、本の冊数が多いこと、フロアが2階と3階に分かれていることに驚きました。貸出・返却や配架、整齊の仕方を丁寧に教えてもらい、実際にやってみると思ったより難しかったです。藤女子大学のことも知れて楽しかったです。貴重な体験をありがとうございました。

岡田さん

職場体験前は図書館で何をするのかわからなかったのですが、図書館の方や大学生が大学のことや図書館の本の置き場所、カウンターの仕事を教えてくれたので、職場体験を通して色々学ぶことができました。

高山さん

今回の職場体験で、貸出・返却業務や配架・書架整齊の仕事を体験することができてとても良い機会になりました。難しい仕事や細かい作業もたくさんあり、初めての経験でした。実際に貸出をしてみてもとても楽しかったです。



第7回 学生選書ツアー開催

2024年11月に両学部合わせて10名の学生が参加し、選書ツアーを実施しました。直接書店で本を選んだ学生と当日予定が合わないためオンライン選書での参加となった学生もいました。書店で本を選んだ学生からは「楽しかった」「来年も実施してほしい」との声がありました。

次年度以降も選書ツアーは開催予定です。本に興味のある学生さんはぜひ参加してください。



LiSt 活動報告 第10回

LiSt (リスト) とは?
Library Studentの略で、
図書館で働く
学生スタッフの愛称です。

【もっと身近に！図書館の一年間の挑戦と継続】

2024年度は、“図書館をもっと身近に感じてもらえるように”という思いのもと、活発な活動を続けた一年となりました。

藤陽祭では、例年人気のブックギフトや、「偏愛本ブックカバーコンテスト」の企画を行いました。参加者の皆様の愛が表現された素敵な作品を御応募いただきました。そのほかにも新たな試みとして、本の展示と組み合わせた「大学祭版パケ読みミッケ!」、LiStによる絵本の読み聞かせや、「食欲の秋フローチャート」などを行いました。学生以外にも多くの方に来館していただき、ご助力いただきながら、図書館を盛り上げることができました。

そのほかにも、新入生オリエンテーションでの図書館紹介や、オープンキャンパスでの企画参加、クリスマスでのおすすめ本のツリー展示など、学生参加型の様々な企画に取り組んで参りました。

新たな試みの中でも、常設展示の「ブックマンション」や、広報誌「LiSt Times」発行なども内容の改良をしながら続け、盛りだくさんの活動となりました。

今後も、図書館を利用していただけられる方にもっと身近なものに感じていただけるよう、様々な活動を試みていきたいです。(北16条LiSt 高山)



【親しみやすい図書館へ】

2024年度は新たな企画やイベントに取り組み、LiStの活動が広がった一年となりました。具体的な取り組みとして、藤花祭のイベント企画、アンケートの実施、目安箱の設置を行いました。

藤花祭では、お題に沿った本を三冊選ぶ「本収穫中」というイベントを行いました。お題を工夫することで子どもから大人まで幅広い方々に楽しんでいただくことができました。収穫した本を展示することで、地域の方々に図書館の本について知っていただくきっかけとなりました。このイベントを通して、前年度よりも多くの方々に図書館に足を運んでいただき、地域の方々との交流を深めることができました。

また、アンケート「あなたの好きなジャンル、興味のあるジャンルは何ですか？」では、アンケート結果TOP3のジャンルの本をLiStが選り紹介文とともに展示しました。

そのほか、新入生図書館オリエンテーションの実施、本縁結びの企画、「花川LiSt通信」発行など様々な活動も少しずつ改善しながら継続しています。

目安箱でいただいた、学生の方からの意見を参考に、より利用しやすい図書館づくりや楽しいイベントを企画していきたいと考えています。(花川LiSt 古山)



「食べるもの」と 「食べること」

食環境マネジメント学科 / 食物栄養学科 八島 絵美

皆さんは、「食べるもの」と「食べること」、どちらを優先しますか？ この回答にかかわる本を2冊紹介させてください。

1冊目は、現代家族の実態と変容を探るために、食卓を定点観測の場とした岩村暢子の『ぼっちな食卓－限界家族と「個」の風景』。この書籍は「家族はバラバラがいちばん快適！」という衝撃的な帯で紹介されています。調査結果から見えてきたのは、家族という一つの集団の中に宿る異常なまでの「個」の尊重。家族が毎日何を食べているかは「個人的なこと」なので、聞かれても「わからない」というシビアな実態。岩村はこの調査を通じて、「どんな食生活がその後の家族にどんな影響を与えるか」よりも、家族がお互いの「個」の自由を優先しようとする行為そのものに警鐘を鳴らします。なぜならば、「個」の尊重は食生活を基本とする健康管理についても、家族に「言われたくない」「言いたくない」人達を増長させると同時に、「自己責任」というロジックを自明のものにしてしまうからです。

岩村は、そのような状態を救う食事として「共食」をあげています。共食にはコミュニケーションの意味合いもありますが、著者がそこに価値を見出すのは、「人の好みや体調を気にかけて用意する」「人に合わせて好みではないものも食べる」といった自分以外の「他者の存在」です。しかしこれまで「共食」は、各家庭においてなされてきた長い歴史があったはず。なぜ現代において「共食」は廃れてきたのか、なぜ「個」の尊重が重視されてきたのか考える必要があります。

そこで、次に紹介したいのが、「食べもの」自体を見直すことより以前に「食べること」を再認識しようとした藤原辰史のエッセイ・書評集『食べること 考えること』です。藤原はこの著書の中でルース・シュ



ウォーツ・コーワンが書いたアメリカの歴史書『お母さんは忙しくなるばかり一家事労働とテクノロジーの社会史』を紹介しており、そこにはアメリカで実践された共同食堂の失敗例が記載されています。当初、共同食堂の立案者は、この実現によって家事労働は軽減され、食材費もコストダウン、さらに共食によるコミュニケーションも深まるだろうといった期待をもっていました。しかし実際は、プライベートが大事、他人が作る食事は不味い、育ち盛りの子供に冷凍食品でよいのか、といった様々な考え方が衝突し、最終的には失敗に終わったというものです。これはアメリカの例ではありますが、「共食」の廃れや「個」の標榜を考察するうえでなかなか興味深いものです。

藤原がこの書籍で主張したいのは、「食べるもの」より「食べること」。つまり食を場所から考える食の空間論の再認識であると言えます。たとえば藤原はフードコート为例にあげ、そこは「面識のない個人や集団が一定の場所に集まり、出入りが自由」「ショッピングセンターと休憩所と店舗の狭間にあり、提供者である企業の意図からも遊離しやすい」場所であるとし、個人の好みのメニューが選択できる「個食」と、親しい人の語らいの場としての「衆食」が実現できる「なんとも不思議な場所」としています。

今回は、「食べること」を「場所」に限定しましたが、「食べること」とは他にもいろいろあるはずです。この2冊が、皆さんにとって「食べるもの」と「食べること」をあらためて考えるきっかけになれば幸いです。＊ちなみに2冊とも著者は北海道生まれです。



『ぼっちな食卓：限界家族と「個」の風景』
請求記号：498.5/194（花川館所蔵）
『食べること 考えること』請求記号：383.8/F68（本館所蔵）
『お母さんは忙しくなるばかり：家事労働とテクノロジーの社会史』
請求記号：590.2/C89（花川館所蔵）

● 編集後記 ●

巻頭言は「『Tolle, Lege - 取って読みなさい -』 - 聖アウグスティヌスが聞いた天からのつぶやき -」と題して、渡邊学長から寄稿していただきました。そのほか、先生方に著作の紹介文と資料Naviでは図書2冊の紹介文を、在学生からは図書館実習の感想などを寄稿していただきました。ご寄稿いただいた皆さまありがとうございました。

4月は新たな気持ちで大学生活をスタートされた方も多いと思います。様々な出会いも待ち受けていることでしょう。図書館で手に取った本が新しい出会いや発見のきっかけになり、より充実した大学生活となるよう、図書館も何かお役に立つことができれば幸いです。(O)



図書館キャラクター
「きしんさん」

スマートフォンでは
アプリを利用できます



藤女子大学 図書館だより 第104号 2025.4

発行者 藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目

TEL 011-736-5407 FAX 011-709-4770

<https://www.fujijoshi.ac.jp/library/>